

〔釋名^四首飾〕唇脂以丹作之象唇赤也

〔女用訓蒙圖彙^三〕髮の事

唇は丹花の唇とて花にたとへたり是もいたゞ赤きは賤じ、ほのぐとあるべし、

〔好色一代男^三〕木綿布子もかりの世

上方のはすは女と思しき者十四五人も居間に見えわたりて、其有様可笑しなげに、髪ぐるく

巻いて、口紅むさき程塗りて、^略下

〔毛吹草^二〕紅粉^{つる}爪^{つる}唇^{つる}

〔嬉遊笑覽^一下〕爪^{つる}べにとて、爪の先に紅をさせども、爪を染るがもととなり、剪燈新話、四時詩、要染織

織紅指甲、金盆夜搗鳳仙花、注に女子採花塗指甲、則如著臘脂、この脂甲を染ること癸辛雜識集、そ

のほか諸書にみゆ、^略中大和本草に、鳳仙花^{フシキナ}女兒此花と酢漿草^{カタバギ}の葉をもみ合せて爪をそむと記

せり、筑紫あたりには、其如くする故に、つまくれなると名付るなり、女郎花物語に、ふかつめとり

たる指の先、ぞりかへりたるやうなるに、べにいたくさしたるは、むくつけくさへこそ見え侍れ、

女鏡^{慶安三} 爪のきりやう、ふか爪好み給ふべからず、べにいかにもうすくさし給ふべし、^略中懷

子俳諧集^九 爪べにをさすは蝦手のもみぢかな、^真佐夜中山集、べに染の手を血の色にあやしま

れ、とりぬる爪もふかきたしなみ、^明

〔近世女風俗考〕頬紅爪紅の事

高貴のうへはえらず、爪紅などする人き、も及ばず、^略中如此變じきたれるは、天明寛政の頃と

おぼし、

〔女用訓蒙圖彙^三〕髮の事

爪紅も、けしからず赤きはつたなし、是は降みふらすみなる時雨に染し初楓の葉さきの紅葉し